広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」第４号　2023　210－219

中国における下層出身の中学生の重点高校への進学過程

― 家庭と学校生活の影響に着目して ―

包　　婉　蓉

（2023年10月６日受理）

The Process of Entering Key Senior High Schools for Lower Class Students in China
― Focus on the influence of family factors and school life ―

Wanrong Bao

Abstract: This paper will examine a process of junior high school students from the lower social strata in China entering key senior high schools, especially the influence of family factors and school life. Firstly, from the influence of family factors, the motivation to study among the students arose from the hard work of their parents and their desire to move up the social ladder. Because of fewer out-of-school educational resources, those students were willing to trust schooling and, to follow school policies. In addition, since their parents were not directly involved in their children's education and career choices, such students had to create their own opportunities. Secondly, from the influence of school life, junior high school students from the lower social strata formed the ability, habit, competitive consciousness, and school adaptability to pass examinations. Thirdly, we clarified that those students faced many problems due to the lack of middle class culture after entering key senior high schools.

Key words: process of entering key senior high schools, family factors, school life
キーワード：重点高校へ進学過程，家庭的要因，学校生活

１．問題の所在

本稿の目的は，中国の下層出身の中学生が重点高校に進学する過程において，家庭や学校生活がどのような影響を与えているのかについて，インタビュー調査により明らかにすることである。

中国の後期中等教育段階には，「重点高校－非重点高校－職業学校」[1)] というヒエラルキー構造がある。その中で，重点高校は学校設備や環境，教育予算などで優遇されており，大学進学率も高いエリート高校と考えられる。重点高校に進学すると，重点大学に進学できるチャンスが開かれており（唐 2015），大学卒業後の初職の給料なども高い（呉ら 2016）ため，重点高校への進学競争は非常に激しい。

しかしながら，重点高校に進学できるのはごく一部の生徒にすぎず，その多くは出身階層の高い者である。呉（2013）によると，父親の職業地位が高ければ，また，親の学歴が高ければ，大都市出身であると，重点高校に進学する可能性が高いという。つまり，「社会階層の上層出身者－重点高校，下層出身者－非重点高校，職業学校」というルートが定着していることが指摘された。また，包（2022）は文化的側面に着目して，貧しい家庭出身の中学生，または本来の文化資本が少ない中学生であっても，学習生活で正統的文化を獲得すれば，重点高校への進学意識が形成されることを明らかにした。この研究では，社会階層の下層出身者が

本論文は，査読付き論文である。

重点高校に進学できる可能性が提示されたが，キーになるのが，学習生活で身につけた正統的文化，すなわち，ブルデューが提起したように中産階級の文化に親和的で，学校教育や社会評価により正統化された文化である。例えば，美術館・博物館の訪問や，ピアノの練習，クラシック音楽・文学作品の鑑賞，論理的に議論する・書くこと，塾や予備校・習い事に通うこと，マスメディアの接触などの行動，および，これらの行動にともない身につけたハビトゥス，美的性向などである。

しかし，実際には，一部ではあるが，家庭では文化資本に恵まれておらず，学校においても正統的文化を身につけないまま重点高校に進学できた下層出身の中学生のケースもあると考えることができる。こうした正統的文化を有しない下層出身の中学生の重点高校への進学意識の形成や進路決定の過程は量的研究によって一般化することは困難である。多様な状況に置かれた下層出身の生徒はそれぞれ独自の論理によって進学の意志を形成したと考えられる。そのため，本稿は質的研究により，下層出身の中学生の重点高校への進学過程を解明したい。

一方，中国では下層出身の中学生はどのように重点高校進学を経験したのかという問いに回答できる先行研究は管見の限りほとんどなかった。示唆に富むのが，エリート大学に進学できた下層出身の学生に着目した研究である。ここでは，これらの先行研究を概観し，本稿の課題に迫りたい。董（2015）は211・985大学[2)]に進学した10人の農民家庭出身の学生に対する事例研究により，それらの学生の学業達成の要因を明らかにした。その結果，これらの農民家庭出身の学生は勉強により農村からの逃避を望み，また，親の犠牲に報いることを欲していた。それを達成するため，彼ら／彼女らが教育の価値と効用を認め，積極的に図書館や無料の放課後補習等を利用しながら，家庭文化資本の不足を補っていたという。また，程ら（2016）はある重点大学の学生が書いた自伝を分析対象とし，一部の回答者にインタビュー調査を行うことで，中国の下層家庭文化により，下層出身の学生は高校時代に高いモチベーション，向学校的な精神的資質を持ちながら，学習を道徳問題として扱い，高い学業達成を遂げたことを明らかにした。さらに，余（2018）は中国でTOP10のＡ大学に進学した17人の貧困層の学生にインタビュー調査を行い，エリート大学に進学できた貧困層の学生の文化を解明した。その結果，これらの貧困層の親は教育熱心であり，精神的な支援を多く提供していた。貧困と資源の不足という不利な状況では，これらの貧困層の子どもが運命を変えよう，親の犠牲に報いようと，自らを奮い立たせることにもなった。家庭内の文化資本の不足を補うために，彼ら／彼女らが家庭外（教師，クラスメート，書籍など）から資源を積極的に獲得していた。

以上の先行研究によると，社会階層の下層出身の子どもは家庭では下層の文化を受容しながら，勉強の意欲や向学校的価値観を形成しているとともに，学校では教師やクラスメートなどから積極的に資源を利用し，家庭の文化資本の不足を補ったうえで，エリート大学に進学していた。しかし，以上の先行研究は，出身階層の低い生徒が文化資本の不足を補ってエリート大学に進学したという「成功」にのみ着目している。正統的文化を持たないまま重点高校に進学する下層出身の中学生の進学過程については看過されている。また，下層出身の生徒の「高校から重点大学へ」という進学過程が明らかになったが，その前の段階として「中学校から重点高校へ」という進学過程は十分に検討されていない。

以上を踏まえ，本稿は「中学校から重点高校へ」の経験者の事例を通して，家庭や学校生活という２つの側面から，正統的文化が欠如している下層出身の中学生の重点高校への進学過程をより包括的に検討したい。それによって，中国における中学生の進学意識・進路選択に関する研究を一層立体化させたい。

２．研究方法と調査概要

本研究では2023年３月30日から４月24日にかけて，中国福建省Ｎ市での中学校から重点高校に進学した経験のある社会人３人に対して，一人当たり一時間程度の半構造化インタビュー調査を行った。Ｎ市は福建省の東部にある中都市であり，人口は300万人程度である。歴史や地理，交通などにより，経済の発展が遅れていたが，近年，産業の現代化が進んでいる。

表１は調査対象者の情報である。表１に示したように，調査対象者の全員が親は中卒あるいは小学校卒である。親の職業については，ほぼ工場の労働者や，農民，および無職である。本稿は『当代中国社会階層研究報告』（陸 2002）を参考にして，親の職業および，経済資本，社会資本，文化資本の多寡によって，社会階層を定義する。親が「政府機関／管理職／専門職」であり，上記に述べたような三種の資本が豊かな層を上層に，また，少ない「自営業者・サービス従業者」などを中層とした。生活が貧困状況にあり，就業の保障がない工場の労働者や農民，無職の親を持ち，家庭には経済資本，社会資本，文化資本がごくわずかでしかない層を下層と定義している。また，インタビュー調査

のやりとりから分かるように，調査対象者全員は子どもの頃よく家庭の経済的問題を実感しており，自身の出身階層が低いと認識している。親は学歴が低く，辛い肉体労働で忙しいため，読書や美術館・博物館の訪問，クラシック音楽を聞くこと，楽器を弾くことなどの文化的活動をあまりしていなかった。家庭には美術品・骨董品などの文化財や，文学作品・百科事典などの蔵書なども少なかった。３人とも幼い頃から出稼ぎに行った親と離れ，祖父，祖母と生活しており，家族と文化的活動に参加したり，家族から勉強を教えてもらったり，助言されたりすることはほとんどなかった。放課後や休みの際に，「外で遊ぶ」ばかりであり，「成り行き」で育った。調査対象者たちに普段の活動や趣味などを尋ねると，彼女らがドラマ，流行音楽などの大衆的文化に興味を示しており，正統的文化活動にあまり参加していなかった。したがって，本稿の調査対象者たちは親･家庭から文化資本を相続できておらず，正統的文化が欠如していると考えられよう。

表１　調査対象者の情報

	職業	家庭状況	教育状況
A（女）	会社員	農村出身、ひとり親、父親は工場の労働者（階段修理）、小学校卒	市級重点高校⇒二本大学
B（女）	公務員	農村出身、留守児童、両親はともに農民（椎茸の栽培）、小学校卒	県級重点高校⇒一本大学
C（女）	高校の教師	都市出身、ひとり親、父は無職、中学校卒、母は出稼ぎ、小学校卒	市級重点高校⇒一本大学(211)⇒修士

３．分析の結果

3.1. 家庭の影響

本節では，社会階層の下層の親はどのように家庭教育を行っているのか，また，それがいかに子どもの重点高校への進学過程に影響を与えているのかを検討したい。インタビュー調査の結果から，下層の親の文化や家庭教育と子どもの重点高校への進学との関係を示す事例が確認できた。

(1) 学習意欲の要因

インタビューの中で研究協力者たちに学習意欲が生じるきっかけを尋ねると，学習意欲の背景には親の労働の辛さや親の強烈な階層移動の願望があることがわかった。例えば，Ｂは小さい頃から見ていた農民としての親の苦労を振り返りながら，次のように語った。

B：親は勉強しないと将来苦労するとか，読書は運命を変えるとかよく言っていた。勉強ができなければ，将来建設現場で寒風と烈日に耐えながら肉体労働しなければならないって。「私たちは文化（学歴）が低いせいで，いろいろ苦労してきた。だから，あんたに勉強してほしい。それであんたも，あんたの子どもも私たちのように苦労しなくてよい」って。
筆者：親の話をどう考えますか。
B:とても賛成，まったくその通りだと思った。だから，私は一生懸命に勉強していた。

Ｂの語りに象徴されるように，子どもは親を「反面教師」として勉強の必要性を学んでいる。椎茸の栽培で３人の子どもを育て，ぎりぎりの生活をしているＢの親は学歴が低いことによる「しんどさ」を子どもに悪い見本として示し，自身の言動によって，勉強しないと将来苦労すると悟らせていた。その背後には，自分と同じ「寒風と烈日に耐えながら肉体労働」をさせないように，「読書」により次世代の「運命」を変えようという強烈な階層移動の意志が潜んでいる。中国の学歴社会では「良い高校→良い大学→良い職業→良い生活」という認識が強く根付いている。親は学歴が低いにもかかわらず，学歴社会でのコンプレックスにより，学歴信仰を持っている。小さい頃からずっと労働の「しんどさ」を経験しているＢは親を「反面教師」と認識し，苦学による立身出世という学習意欲が生じていた。

以上のように，下層の中学生は親を「反面教師」として，学習意欲を高めている。つまり，下層の親の労働の辛さと階層移動の願望は中学生だった研究協力者たちに強いインパクトを与え，その学習意欲や向学校的な価値観の形成に拍車をかけたと考えられよう。

(2) 経済的負担

研究協力者たちに親の教育投資の状況を尋ねると，中学校の選択が中心であり，学校外での教育投資が少なく，学校教育を信頼していることがうかがえた。まず，ＢとＣは親が骨身を惜しまずに，教育環境と進学実績が良いと思われる高額な私立中学校に進学させた。２人は以下のように語った。

B：鎮[3]にある公立中学校には荒れた子が多く，教育環境も良くなかったから，親は私を教育環境と質が良い県にある私立中学校に送ると決めた。公立中学校と比べ，学費も宿舎の費用も高かった。その時に，この高額な学費を無駄にしないように努力しなければならないと心で誓った。

C：母は教育経験が少ないけれど，外（台湾）で懸命にお金を稼いで，そのお金を使って私の教育の質を高

めようとしていた。実は義務教育政策に応えた学費が安い公立中学校にも進学できるけれど，私立中学校の方が良いと聞いて，母にその願いを伝えた。母は躊躇せずに，すぐ私立中学校に進学させた。

以上のように，経済的制約がある下層の親は苦労をして「お金を使って教育の質を高めよう」と，子どもを質の高い私立中学校に進学させていた。親の苦労と教育のために払った犠牲に対して，Bは「この高額な学費を無駄にしないように努力しなければならない」と決意していた。

学歴社会と言われる中国では，強いメリトクラシーによるコンプレックスのもとで，苦労して稼いだ収入の多くを子どもの教育に使い，文化資本による格差を補おうとする下層の親は少なくはいない。小さい頃から親の肉体労働の辛さと家庭の経済的負担を理解している下層出身の中学生にとって，私立中学校に入るのは親の苦労と犠牲を意味しており，大きな「道徳的負債」（程ら 2016）を背負うようになる。高額な学費を稼いでくれた親の努力，愛情を無駄にしないように，勉強は怠ってはいけないと考えるようになる。

しかしながら，下層の親の教育投資行動は学校の選択に限定されており，学校外での教育投資はあまり行われていない。例えば，Aは学校外での教育投資について次のように語った。

A：クラスメートは学校外補習でお金を多く使ったけれど，父は知識は自分で学ぶべき，勉強ができるかどうかは個人の能力によるものだと考えていて，学校外補習は必要ではないと言った。

つまり，「学校外補習でお金を多く使った」上層の親とは異なり，下層の親は「知識は自分で学ぶべき，勉強ができるかどうかは個人の能力によるもの」と勉強を捉えている。また，学校外での教育投資を行っても，主に学校の主要科目の課外補習であり，子どもが学習内容についていけない場合のみ行われていた。一定の期間で効果が見られなければ，すぐやめていた。

B：中学校一年の時，英語が苦手だった。泣きながら親と相談して，親は英語の課外補習に一年間くらい通わせた。

C：習い事に行ったことはないけれど，生物の補習に行ったことはある。一学期も経たずにやめた。
筆者：なぜやめましたか。
C：役に立たなかったから。補習に行っても，わからなかったことはやはりわからない。教え方はやはり学校の先生の方が良かった。学校で授業をきちんと聞いたら十分だった。

以上のように，Bは「英語が苦手」なため，「英語の課外補習に一年間」通った。「役に立たなかった」ため，Cは生物の補習を「一学期も経たずに」やめた。大都市などの上層の親と子どもは特技の育成や創造的な思想の形成などを目的として学校外での教育投資を積極的に行うとされる（張ら 2021）。それに対し，下層の親と子どもは学校外での教育投資をただ勉強の不足を補うための手段として使っていることがうかがえた。このことから，下層の親と中学生は長期の収益ではなく，短期の収益によって教育投資の必要性を判断していたと推測できよう。

学校外教育の継続的投資に関心がなかった親を持っている中学生は，逆に学校教育を信じて，忠実に学校の政策や教師の指示に応えると推測できよう。例えば，Cは「学校で授業をきちんと聞いたら十分だった」と語り，学校教育を信頼していた。つまり，学校外教育を積極的に利用している上層の子どもと比べ，学校外教育資源が少ない下層出身の中学生は学力を高めるために学校を信頼しなければならないと解釈できよう。

(3) 教育に関われない保護者

親の教育との関わりを尋ねると，関心があるがどう関わるべきか悩む下層の親の様子，それによって下層出身の中学生が自身で一生懸命にチャンスを作らなければならない様子が見られた。まず，Bは親が衣食住への配慮や成績への関心から子どもの教育に関わろうとしていたことを語った。

B：試験の成績が出た時，親は試験用紙と成績を見つめていた。成績をどう分析するか，どうしてよい点数／悪い点数かわからなかったのに…親は私の衣食住をすごく重視していた。とくに，裏方仕事をよくやってくれた。栄養のある食べ物，飲み物とか。親はよい体がある限り，学習の苦しみに耐えられると思っていたから。親はそれ以外のことはよくわからないから，私はいろいろ考え，チャンスを探さなきゃ…ずいぶん苦労したよ。

つまり，小学校卒のBの親は子どもの教育に関心を持っているが，中学校の学習経験がないため，指導ができなかった。子どもの試験の成績を見ても，「点数」しか知らず，「成績をどう分析するか」はわからなかった。勉強を指導できないため，子どもの「衣食住」に

重点を置いた。「学習の苦しみに耐えられる」ように，「栄養のある食べ物，飲み物」を提供して，裏方仕事を尽くしながら，子どもの教育をサポートしていた。また，母親が出稼ぎに行くため，祖父祖母と一緒に住んでいたCは，親の教育との関わりが「成績を聞く」ことにとどまっていると語った。

筆者：親は勉強を指導したり，学習状況に注目したりしていましたか。
C：全然なかった。成績を聞くだけ。先生から私の成績がよく，学校でも真面目だと聞いてすごく喜んでくれたけれど，私のことは気にしなかった。勉強や進学に関してすべて自分でがんばった。
筆者：どうやってよい成績を取って，学校で真面目な態度や行動をしていましたか。
C：どういうか，それはいわゆる「貧しい家庭の子どもほど，思慮深い」のでは？親の褒め言葉が欲しく，良い子という印象をずっと維持したかったからだと思う。だから，とても真面目に勉強していた。

以上の語りのように，社会階層の下層の親は子どもの教育に関わろうとしても，学歴が低く，学校の知識を持っていないため，衣食住や成績への関心しか持っていなかった。これらの親は子どもを「良い子」と思って，あまり子どもの学習を「気にしなかった」し，勉強や進学をすべて子どもに任せたままだった。これは，学歴とそれに伴う学力を持っていない下層の親が中産階級のように学習の指導を提供できないため，子どもの能力を子どもが話す通り信じなければならないと解釈できよう。

親の期待と自分が背負った責任が分かったこれらの下層出身の中学生は「思慮深」くなった。「親の褒め言葉」や「良い子という印象」を維持するため，親にとって望ましい行動をしなければならない。そのため，精一杯勉強したり，学校で望ましい行動を取ったりしながら，向学校的な習慣や価値観を形成していると推測できよう。しかし，学校経験や学校の知識が欠如している親は「衣食住」や「成績を聞く」こと以上に教育に関われない。そのため，これらの中学生は学校では上層出身者よりも「苦労」して自らチャンスを作らなければならないことになる。

(4) 子どもによる進路選択

進路選択について，共通試験で点数が第一志望のTOP 3の省級重点高校に足りず，志望を下げて市級重点高校を選択したAの事例と，志望している県の重点高校に進学したBの事例，積極的にチャンスを作り，地元を離れ，先進市の重点高校に進学したCの事例がある。これらの異なる進路選択の事例から分かるのは，親が進路選択に直接的に関わっていないことである。典型例としてCの進路選択についての語りを見ておこう。

C：クラスメートから先進市の重点高校の事前募集のことを聞いた。故郷より大きい先進市を見たく，自分でチャンスをつかみたいから，やってみたいと思った。母親にその願いを伝え，母親は先進市に行けばよかったと言いながら，喜んで私を支えた。
筆者：親はその中学校と連絡を取ってくれましたか。
C：いいえ。親はよくわからなかった。すべて自分でやった。ネットの申し込みも何でも。母親は最後の結果だけ出てきたという印象だ。

以上のように，Cは中学校卒業後の進路選択の際に，「中学校との連絡」や「ネットの申し込み」など，すべて自分で計画していた。受験や進学経験がなかった親は直接的に関わるのではなく，外でお金を稼いで，裏で子どもの進学と夢を支え，「最後の結果」のみ関与した。しかし，子どもの進学を支えると言っても，「何も考えない」という限界が見られた。

C：親には感謝の気持ちしかないけれど，やっぱり視野が狭すぎると思う。成績や学歴が高ければよいことしかわからなかった。親は普通高校に進学すればよいと知っていたけれど，どこがどのようにどの程度よいのかはわからなかった。また，本科大学，大学院に進学すればよいと知っていたけれど，具体的な目標，どれだけよいのかはわからなかった。「よい」と思われるものは本当に私に合うかどうかを問わずに，何も考えずに「よい」と思っていた。

つまり，教育経験が少ない下層の親は，「普通高校に進学すればよい」「本科大学，大学院に進学すればよい」と考え，学歴の価値を認めていると考えられる。それは親自身の経験から，子どもに同じ苦労を味わわせないように，高い教育期待を持つことになった（劉ら 2019）と解釈できよう。しかしながら，親は進学の意味を十分に理解していなかった。下層の親は学歴による上昇移動を強く期待するが，経験がないため，いかにして実現できるのか，失敗の代償が何なのかがわからないという限界が見られる。

以上より，正統的文化が欠如している下層出身の中学生の重点高校への進学過程には，家庭の影響がみられた。これらの独特な家庭教育は子どもの学習意欲や，

向学校的価値観・習慣の形成，機会づくりに影響を与えていたと考えられよう。このように，中国における下層家庭文化の進学に対する作用（程ら 2016）が確認できた。しかし，進路選択に対して，下層の親は受験経験や進学経験がなかったため，直接的に関わっていない。

3.2. 学校生活

前節の分析により，正統的文化が欠如している下層出身の本稿の研究協力者たちは家庭の影響で逆に勉強に対する意識や，向学校的価値観・習慣の形成に有利であることがわかった。しかし，下層の家庭教育のみでは，進学競争に勝つのは難しいと考えられる。そのため，重要な場として中学校にも注目すべきであろう。そこで，本節では，これらの正統的文化が欠如している下層出身の中学生の学校生活に主眼を置き，重点高校への進学過程を明らかにしたい。分析の結果を先取りすれば，中学校では試験に対応できる能力と習慣，学校適応力の形成，さらに，競争意識の加熱がその重点高校への進学に影響を与えていた。

(1) 試験に対応できる能力と習慣の形成

下層出身の中学生は学校生活でどのように勉強していたのだろうか，また，どのように進学に求められる能力を身につけたのだろうか。インタビューのやりとりからわかるように，これらの生徒は学校生活で教師やクラスメート，さらに教科書から，試験に対応できる能力と習慣を身につけていた。まず，研究協力者のAは次のように語った。

A：学力の向上と言えば，学校の試験に負うところが大きい。中学校１年から月考（月に一回の試験），中間テスト，期末試験があった。とくに３年生になると，試験がさらに頻繁に行われた。試験の解答に対し，先生とクラスメートの説明はすごく役立った。

このように，Aは「試験の解答に対する先生とクラスメートの説明」により，試験に対応できる能力を形成していた。また，Bは隣の席の「優秀な」生徒から，試験に有利な勉強の習慣などを学んだという。

B：隣の席の子の勉強の仕方や習慣にも影響された。その子はノートをとる時，教科書に書いて，手帳にもう一回書いていた。それは知識の暗記に有利だよね？英語を暗記する時，彼女はいつもセンテンスを大きい声で読みながら暗記していた。私もその勉強の仕方を参考にして，良い習慣になった。とくに，ノートを取るのが大好きだ。それは大学卒業後の公務員試験にも役立ったよ。公務員試験向きの授業を聞く時，ノートを取って，どこがキーなのかすぐわかったから。

Bは隣の席の生徒から，ノートの取り方や，英語の暗唱の仕方を習った。授業の内容を「教科書に書いて，手帳にもう一回書」いたり，英語のセンテンスを「大きい声で読みながら暗記」したりしていた。これらの「良い習慣」は中学校時代の試験に対応できるだけでなく，大学卒業後の公務員試験にも役立ったという。長期に蓄積してきた勉強の習慣により，「どこがキーなのかすぐわかった」ため，容易に試験に必要な知識を覚えられ，試験に対応できるようになったと推測できよう。さらにCは中学時代に教科書を一文字一文字まで暗唱していたことを語った。

C：中学校１年の頃，勉強がわからない時，教科書をとっくり読んでいた。各センテンスの意味をきちんと理解しながら読んでいた。教科書を読むことにより悟った…中学校の知識は簡単だから，独学で知識が納得できた…中学校時代，いつも本を暗唱していた。歩いていてもバスに乗っていても。しかも，細部まできちんと暗記していた。難しいわけではなく，言葉とか細かい区別があった。それは間違いやすいところ。試験もこのような細かい知識を問うていた。時々，一文字だけで正解が異なった。試験の題目を比較しながらまとめた。だから，教科書の細部まで，一文字一文字まで気をつけながら，試験が何をどのように問うかを予想して暗記していた。

Cは中学校の試験は「難しいわけではなく，言葉とか細かい知識」が問われると認識している。このような試験に対応できるように，「試験が何をどのように問うかを予想」しながら，「各センテンスの意味をきちんと理解し」，教科書を「細部まで」忠実に暗記していた。

これらの語りから，正統的文化が欠如している下層出身の中学生は学校で教師やクラスメートと試験問題を分析したり，「優秀な」生徒からノートの取り方，英語の覚え方等をまねし，「良い習慣」を形成したり，教科書を細部まで暗唱したりしながら，試験にうまく対応できる能力を獲得していた。ここから，下層出身の中学生が学校生活で身につけた能力はおそらく試験に対する敏感な感覚やコツである可能性が高いと推測できよう。これらの能力は上層出身者が家庭や家庭外教育から相続・獲得した総合的な能力や教科等横断的な学び，ハビトゥス，美的性向などの正統的文化とは

異なると考えられよう。

中国では高校への進学はほとんどペーパーテストの成績によるものである。荒牧（2016）は客観的かつ基準の明確なペーパーテストによる学力評価は，必ずしも長期にわたる文化資本の蓄積が必要ではなく，相対的に短期間で向上しうる可能性が高いと指摘した。すなわち，中国では中学校から高校への進学競争において，正統的文化を身につけなくても，一部の能力が高い者は教科書の暗唱や過去問の分析を通じて試験に対する敏感な感覚やコツを蓄積することで，進学する可能性があると考えられよう。

(2) 学校適応の様子

インタビューで学校での行動を尋ねると，研究協力者たちは学校に適応し，教師に敬意を払って真面目に勉強していたことがわかった。例えば，B は次のように語った。

筆者：中学時代はどんな生徒だったと思いますか。
B：真面目で自律的な生徒。中学校では先生を尊敬していた。最初，英語が苦手だった。少し成績が良くなった時，英語の先生は私に注目し始めた。数学の先生は担任だったし，彼もいつも私を励まして授業中よく私に質問していた。先生方の関心と励ましを感じて，質問されると絶対うまく回答できるように，真面目に勉強していた…高校入試前の復習の段階，先生のスペースに合わせながら，自分も計画して復習を進めていた…当時，本当に雑念がなく，一心不乱に勉強に集中していた。本当に毎日毎日真面目に勉強していた。

B は学校生活では「真面目」で「自律的」であり，「先生を尊敬して」おり，学校の要請に適切に応えていた。先生とも親しく，先生の「関心と励まし」を感じて，その期待に沿って「先生のペースに合わせながら」「雑念がなく，一心不乱に勉強に集中」していた。また，C は B と同様のことを語った。とくに，「先生がクラスで私を褒めるだけで，私は一層頑張った」と語られたように，先生に褒められるために，向学校的行動をしていた。

以上の語りによると，下層出身の中学生は学校に適応しており，「雑念がなく，一心不乱に勉強に集中」し，「先生が言った通りに頑張ってみたら，成績が上がっ」ていた。下層出身の中学生が学校に適応し，向学校的価値観を身につけることを，程ら（2016）は次のように説明している。下層出身の生徒が進学すると，家庭の資源やサポートを失うため，教師から評価され愛されることを強く望むようになる。つまり，上層出身者よりも学校や教師に強く期待するためだと指摘されている。そのため，これらの下層出身の中学生は中学時代に学校生活や学校文化に馴染み，教師の期待に応えるため，真面目に勉強していた。そのため，進路選択の際には，学校や学校文化への順応を象徴する重点高校への進学を希望することになると推測できよう。

(3) 競争意識と進学アスピレーションの加熱

本稿の研究協力者たちとのやりとりから，下層出身であるにもかかわらず，上層出身者に負けないほど高い競争意識や進学アスピレーションがうかがえた。その高い競争意識や進学アスピレーションの形成について，A は次のように語った。

A：自分が所属しているクラスはａ組（重点クラス）だった。クラスメートはみんな優秀だから，競争意識が自然に生じた。クラスの友人とは誰が宿題を早くできるか，誰が試験で良い点数を取るかを競った。いつも助け合いながら競争していた…その時の進学目標は高く，市の Top ３の S 高校（省級重点高校）だった。

以上のように，A は中学校時代に重点クラス[4]ではいつも「優秀」なクラスメートと「誰が宿題を早くできるか，誰が試験で良い点数を取るか」を競い合い，競争意識と進学アスピレーションが「自然」に高まった。また，村を離れ，所属県の私立中学校の宿舎に住んでいる B は競争意識と進学アスピレーションの形成が「奨学金」と「ルームメートが頑張っている様子」に負うところが大きいと語った。

B：期末試験の成績によって奨学金がもらえるから，親も先生も，私たち生徒自身もすごく（成績を）重視し，学校では成績の順位をめぐる競争が激しかった…学校の寮に住んでいたから，ルームメートが頑張っている様子を見ると，緊迫感が生じた。印象深いのは，ルームメートがいつも深夜まで学校の食堂や教室で勉強していたこと。いつ戻ってくるのかはいつもわからなかった。
筆者：その時の進学希望はどこでしたか。
B：所在県の中学校で勉強していたから，県ではランクが最も高い P 高校（県級重点高校）に進学したかった。みんなその高校に行きたがっていたから，私もそこに行きたかった。

B が所属していた私立中学校は期末試験の成績が優れた生徒に対し，学費を支払えるほどの高額な奨学金を支援していた。激しい奨学金の争奪戦に勝つために，

成績を重視し，競争意識が生じるようになっていた。また，「いつも深夜まで勉強」していたルームメートからも「緊迫感」を感じており，「自分も頑張らなければならない」という意識を持つようになった。「みんなその高校（所在県唯一の重点高校）に行きたがっていた」という理由で高い進学アスピレーショが形成していた。さらに，Cが所属していた中学校では成績によって次回の試験の座席が決まった。「前の席に座ればとても顔が利く」「周りの人に認められたく，成績のよさによる達成感が欲しかった」という理由で，強烈な競争意識と高い進学アスピレーションを持つようになっていた。

C：中学校では成績の順位によって次回の試験の座席が決まった。前の席に座ればとても顔が利くから，自分のサークルではみんな成績の順位の競争をしていた。周りの人に「すごいなあ」と認められたくて，成績のよさによる達成感が欲しかった。だから，その気持ちはいつも背中を押しつつ，前に進ませた。
筆者：その時の進学希望はどこでしたか。
C：最初は所在市でランクが最も高いN高校（市級重点高校）だった。成績に自信があるから，そこに進学できるかどうかは全然心配していなかった…

以上のように，メリトクラシーが強調されている中国では，中学校が受験競争に生き残るため，重点クラスを設置したり，奨学金を提供したり，試験の結果で座席を指定したりして，生徒の成績を上げようとしていた。また，研究協力者たちが受験競争を煽る中学校の方策に積極的に参加している様子が見られた。その中で，高い進学アスピレーション，つまり重点高校への進学意欲がいっそう加熱させられていたと推測できよう。

3.3. 劣等感を感じる高校段階

以上の分析により，家庭と学校生活という２つの側面から下層出身の本稿の研究協力者たちの重点高校への進学過程が明らかになった。しかし，研究協力者のCは，受験に成功したにもかかわらず，重点高校入学後，さまざまな問題に直面していた。彼女が先進市の重点高校への進学を「間違っていた」と疑っていた。

C：実は中学校卒業後の進路選択は間違っていたかもしれない…その高校（先進市の重点高校）の重点クラスに入った。（進学前）クラスメートがそんなに優秀とは思っていなかった。出身市では自分の成績が確かに前の方だったけれど，私の出身市の教育の質が福建省では最も悪いよね？高校のクラスメートはほかの市の優秀な生徒だから，学力が私よりずっと高く，多くは教師の家庭出身だった。だから，入学してから，成績がクラスでは後の方になってしまった。自信がなくなって，何もできないと思って破れかぶれになった。今振り返ると，高校の選択が本当に間違っていたよ。その高校は私にあわなかったんだと思う。うん，高校の質やランクではなく，自分の学力を考えないと…

以上の語りに代表されるように，中学校時代に成績が学校でトップレベルにあるCは進路選択の際に，「高校の質やランク」をもっとも重視して先進市の重点高校に進学した。先進市の重点高校には「ほかの市の優秀な生徒」が集まっており，クラスメートには「教師の家庭出身」で学力が高い者が多かった。入学後「成績が後の方になってしまった」ため，「自信がなくなって」「何もできない」と思うほど劣等感を感じてしまった。そのように，高校時代に「破れかぶれ」になったCは先進市の重点高校への進学を「間違っていた」と評価した。

Cは中学校の学校生活では，学校への適応力や試験に対応できる能力を身につけた。それが「中学校程度の簡単な試験ならば有効だけれど，高校の試験ならば足りない」とCに評価された。このように，それまで身につけた学校適応力や試験に対応できる能力だけでは，高校段階の学習と試験にいかせなくなってしまった。結局，Cは上層出身のクラスメートとの競争に勝てずに，コンプレックスを感じてしまうことになった。

また，たんに学力の不足のみならず，「その高校は私にあわなかったんだ」という語りから，Cが高校段階に劣等感を感じるのは，文化的ミスマッチも影響を与えていると考えられる。Cが進学した先進市の重点高校には「教師の家庭」という上層出身の子が多いため，下層出身であるCは文化的に学校生活に「あわなかった」と感じてしまった。

4．まとめと考察

本稿は「中学校から重点高校へ」進学した者へのインタビュー調査を通じて，中国における社会階層の下層出身の中学生の重点高校への進学過程，とくに，それに対する家庭と学校生活の影響を明らかにした。その結果をまとめれば以下のようになろう。

まず，家庭の影響から見ると，下層出身の中学生の学習意欲は親の労働の辛さや階層移動の願望から生じていたことがわかった。下層の親の教育投資行動は学

校の選択に限定しており，学校外での教育投資に関心がなかった。学校外での教育投資を行っても，主に学校の主要科目の課外補習であり，子どもが学習内容についていけない場合のみ行われた。学校外教育資源が少ない下層の中学生は逆に学校教育を信頼し，忠実に学校の政策や教師の指示に応え，学校では望ましい行動をするようになった。また，下層の親は子どもの教育との関わりが衣食住あるいは成績に対する関心にとどまっており，それ以上に教育指導ができないため，これらの中学生は自ら学校でチャンスを作らなければならなかった。進路選択について，下層の親は直接に関わっておらず，「最後の結果」のみ関与した。

次に，学校生活の影響から見ると，下層出身の中学生は試験問題の分析や，ノートの取り方や英語の覚え方などの「良い習慣」を身につけること，また教科書を細部まで暗唱することにより，試験に対応できるような能力を獲得していたことがわかった。また，中学校では，教師とは親しく，教師の期待に応え，真面目に勉強しており，学校に適応している様子が見られた。これらの中学生は学校で奨学金を取れるように，また，試験では前の席に座れるように，教師や周りの生徒に褒められるようにすることで，競争意識や重点高校への進学アスピレーションが加熱させられていた。しかし，これらの下層出身の中学生が学校で身につけたのは，おそらく試験に対応できる能力，学校適応力にすぎない。これらの能力を蓄積すれば，正統的文化がなくても重点高校への進学が可能になるだろう。つまり，これらの能力は下層出身の中学生にとってある種の上昇移動のためのストラテジーだと言えよう。しかし，重点高校入学後，研究協力者のＣはさまざまな問題に直面しており，劣等感を感じることになった。

以上の本研究の知見を踏まえ，以下の２点に対して考察を行っておきたい。

第一に，家庭の影響に対する分析によって，「反面教師」などによる動機付けやモチベーションの向上は下層の親に特徴的に見られるものであり，子どもの重点高校進学に大きな影響を与えることがわかる。この知見は中国の下層家庭文化に着目した程ら（2016）の研究結果を裏付け，下層家庭でのモチベーションの向上は下層出身者の「中学校から重点高校へ」という進学段階にも役立つことが示唆できよう。一方，文化資本が少ない下層の親は教育参加が困難であり，直接的には子どもの進路選択に関わっていない。したがって，重点高校に進学するという高いモチベーションを実現するため，下層出身の中学生は家庭よりも学校の方に頼ると推測できよう。

ブルデューは幼少の頃より学校制度の加護の下に委ねられたため全面的に学校制度に身を捧げた者たち，すなわち，本来的な文化資本を持たず，自己形成を全面的に学校機構・制度に負っている者を〈託身者〉と読んだ（1984=1997, p.26, p.387）。本稿の研究協力者たちは，〈託身者〉と同様に，家庭・親の文化資本がないため，学校に身を託していることが推察できよう。これらの下層出身者は学校での成功物語やメリトクラシーの教育神話を認め，学校で良い成績と取って重点高校に進学することを階層移動を実現するための手段として，向学校的な価値観を形成し，向学校的な行動をするようにしていたと推測できよう。

第二に，学校生活の影響に対する分析によれば，下層出身の中学生は学校で高い競争意識が加熱されており，試験に対応できる能力や学校適応力を身につけて，重点高校に進学していた。しかし，重点高校進学後，上層出身の生徒に出会い，それまで自慢した成績がクラスでは後の方になって，ショックを受けて「破れかぶれ」になってしまった。

中学校時代に「成功」しても，重点高校では「失敗」をするのは，家庭や中学校では正統的文化資本を継承・獲得できなかったためと推測できよう。中国の高校では，幅広く深い知識や，知識の統合，さらに，抽象的で論理的な思考力，問題の解決能力，創造力などが求められるとされる（毛 2022）。その場合，暗記や，教科書や教師への依頼，学校に対する過剰適応よりも，正統的文化，すなわち，美術館・博物館の訪問，クラシック音楽・文学作品の鑑賞，塾や予備校・習い事に通うことなどの文化的活動への参加，および，その過程に身につけたハビトゥスなどはこれらの能力の向上と高校での成功につながると考えられよう。これにより，なぜ正統的文化を有しない下層出身の生徒は高校で不適応に陥りやすいかを解釈できよう。

ヨーロッパには＜奨学金少年＞という言葉がある。＜奨学金少年＞とは，労働者階級に生まれ育ち，成績優秀のゆえに＜奨学金＞をえて上級学校に進む者のことである（大石 1987, p. 3）。彼ら／彼女らは社会的には出世したが，中産階級的色彩の濃いグラマースクールや大学等に入って，中産階級のエリートたちと一緒に過ごすと，中産階級の文化がないため，コンプレックスや劣等感を抱くようになった（大石 1987, Hoggart 1957=1974）。本稿の研究協力者たちの事例は，ヨーロッパの奨学金少年に類似している。

ようするに，下層出身者の「成功」にのみ焦点を当てた先行研究とは異なり，本稿は「成功」したように見える下層出身の生徒の重点高校進学後の不適応を明らかにした。重点高校進学後，不適応が生じる原因は下層出身の中学生の中学校生活と学習行動が進学ト

ラックへの参加と暫定的適応にすぎず，学校生活では正統的文化を獲得しない限り，家庭文化資本の不足を補えないところにあろう。下層出身の中学生は本来の文化資本がないため，学業達成や自己形成を学校制度に頼らなければならない。これを鑑みれば，義務教育段階の中学校は生徒の成績や進学実績のみ重視すれば，正統的文化の多寡による階層格差は高校段階以降に顕在化する危惧があろう。

最後に本稿の課題を示しておきたい。本稿は３人の事例によって重点高校への進学過程を検討したに過ぎない。さらに下層出身者の進学を検討するには，さらなるインタビュー調査が必要とされよう。今後，インタビュー調査を蓄積することで，中国での中学生の進学行動を多様な側面から浮き彫りにしたい。

【注】

１）中国の後期中等教育は一般教育を行う普通高校と職業教育を行う職業学校と分けられている。普通高校はさらに，エリート高校とされる重点高校と非重点高校に分けられている。重点高校のなかでは，学校規模や教育環境，資金投入等によって省級重点高校，市級重点高校，県級重点高校という序列がある。

２）中国の大学は本科一類，本科二類，本科三類とランク付けされており，本科一類は211校・985校を含む「エリート大学」であり，本科二類は地方大学，本科三類は民弁大学と独立学院で構成されている。

３）中国の行政区分は，省級（第一級行政区），市（地）級（第二級行政区），県級（第三級行政区），郷級（第四級行政区）の４段階である。

４）中国では，成績など能力の高低によって，生徒を異なるクラスに分ける中学校がある。現在，過激な進学競争を招くなどの理由で，重点クラスの設置は教育部に禁止されているが，密かに行っている中学校がある。

【引用・参考文献】

荒牧草平，2016，『学歴の階層差はなぜ生まれるか』勁草書房.

包婉蓉，2022，「中国における中学生の進路意識に関する研究」広島大学大学院人間社会科学研究科修士論文.

Bourdieu, Pierre, 1979, “Les trois états du capital culturel”, *Actes de la Recherche en Sciences Sociales*, **30**.（=1986，福井憲彦訳「文化資本の三つの姿」『アクト』第1巻）.

————, 1984, *Homo Academicus, Minuit*,（=1997, 石崎晴己・東松秀雄訳『ホモ・アカデミクス』藤原書店）.

程猛・康永久，2016，「「物或損之而益」－関于底層文化資本的另一種言説」『清華大学教育研究』第37巻第4期，pp.83-91.

董永貴，2015，「突破階層束縛－10位80後農家子弟取得高学業成就的質性研究」『中国青年研究』第3期，pp.72-76.

Hoggart, Richard, 1957, *The Uses of Literacy, Routledge*,（=1974，香内三郎訳『読み書き能力の効用』晶文社）.

劉麗鳳・坪田光平，2019，「中国東北農村部における中学生の進路希望の規定要因－質問紙調査に基づく検討－」『教育学雑誌』第55号，pp.1-13.

陸学芸，2002，『当代中国社会階層研究報告』社会科学文献出版社.

毛嘉偉，2022，「高中抜尖創新人才培養研究」華東師範大学碩士学位論文.

大石俊一，1987，『奨学金少年の文学』英潮社新社.

唐俊超，2015，「輸在起跑線－再議中国社会的教育不平等」『社会学研究』第3期，pp.123-145.

呉斌珍・趙心妤・鐘笑寒，2016，「重点高中帯来的工資溢価：来自大学生就業調査的証拠」『世界経済』第2期，pp.142-166.

呉愈晓，2013，「中国城郷居民的教育機会不平等及其演変（1978-2008）」『中国社会科学』第3期，pp.4-21.

余秀蘭，2018，「寒門何出貴子－基于文化資本視角的階層突破」『高等教育研究』第39巻第2期，pp.8-16.

張群・徐璐瑶・邱煥旻，2021，「義務教育階段家庭教育支出現状的城郷対比研究－以河南，江西為例」『管理縦横』第7期，pp.97-98.

（主指導教員　山田浩之）

【付記】

本研究は，JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2132の支援を受けたものである。